鹿沼に生きた人
生きている本

第６号

歌人・江連白潮（びゃくちょう）～清水比庵とのことども～

清水比庵と江連白潮

中禅寺を下って日光の町に入る。東照宮西参道に近い市公会堂の庭には、はじめに書いた清水比庵翁の男体山を望む『春風』の歌碑が建っている。

春風の二荒の山はおほらかに雲居にそびえ　またはかくるる

ここから仰ぐ男体山は戦場ヶ原よりのそれとはちがって、その全貌をあらわさず、僅かに上半部を見せている。昭和 34 年に建立されたこの歌碑は、周辺のはげしい自動車の行き来の中にあって、南は大谷の清流に臨み北西の空には『おほらかに雲居にそびえ』ている男体山を望んでいるのである。

男体山――これこそその美しさを誇るふるさとの山。勝道上人が霊峰と仰ぎ、あらゆる困苦をのりこえて開山してから 1200 年。わたくしどもに親しまれ、信仰の対象として救われて来たのである。　「ふるさとの美」より

２０２２年８月

小さな旅クラブ　鹿沼

文献蒐集雑録

鹿沼に関する本は毎日「日本の古本屋」で検索している。まず「鹿沼」で検索するが、当然「栃木」で出てくる本にも、鹿沼のことが書かれている可能性はある。「下野国誌」に鹿沼のことも書かれているように。また「鹿沼」で検索しても鹿沼にゆかりのある人物は出てこない。しかし、出てくることもある。その辺は古書を「日本の古本屋」に出品している古書肆の判断によるのである。つまりこれは古書肆の販促活動であり、買い手に対する配慮である。

江連白潮に関しては、水戸のとらや書店から入手した「江連白潮選集」があるばかりだった。ある日「江連白潮」で検索してみると「ふたつなき」という本が出てきた。岡山市の古書肆が出品している。さっそく注文してみると、清水比庵という人の写真集であった。白潮が編集にあたってできた本であるらしい。とりあえずしまっておく。

ある日、高内壮介を検索してみた。壮介にはいくつかの詩集や論説といった著書がある他、いくつもの詩や芸術の雑誌に寄稿されているので、雑誌も含め古書の出品数は多いが、毎日調べているので新しい出品があるとすぐに気がつく。「ふるさとの美」という本が出てきた。宇都宮の山崎書店に注文してみた。題字の頭に「栃木県」がある。栃木県にゆかりのある人物 50 人が栃木県の美について語っている。壮介は 6 番目に「黒い藍、中禅寺湖」で語っている。あとで気がついたことだが、10 番目に白潮が「男体山を仰ぐ」を書いており、この中で、清水比庵、半田良平についても、それぞれの歌を添えて語っている。白潮のラフな表情の顔写真が載っている。鹿沼の人としてはもう一人、村山 力という人が「野州人の肌 大谷石」を語っている。

白潮に関する本が 3 冊集まったので、これで何とか白潮をまとめようかと思ったが、白潮の略歴がまったくわからない。あるいは、と思って「栃木 短歌」で検索してみた。すると渡辺幹雄著「とちぎの短歌」が出てきた。さっそく水戸のとらや書店に注文した。副題に「栃木の短歌史と歌人たち」とある。前編が通史、後編が歌人伝である。後編の歌人伝では、小杉放菴、半田良平、石川暮人、清水比庵、江連白潮など 15 人の伝記がまとめられている。江連白潮の項は「風土に根ざした歌風」と題され、(一)その生涯、(二)白潮の歌、と 2 章に分けて書かれている。江連白潮の生涯について書かれた、今のところ唯一の本である。

ある時、福富金蔵の名を思い起こし、検索してみた。「あすなろは勁(つよ)し」が出てきた。三瓶恵史の筆になる「福富金蔵伝記」である。ラッキーだ。宇都宮の山崎

書店が持っていた。第十二章・短歌集は福富金蔵作品集で、その冒頭に酒野谷円明寺の歌碑に並んで立つ白潮の写真を配し、白潮が「歌人、福富先生」を語っている。

さて、「とちぎの短歌」には栃木県における短歌界の変遷の一端が見える。白潮が「二荒短歌会」で比庵の指導をうけたこと、宇都宮で石川暮人らが創刊した「下野短歌」に白潮も断続的に投稿をつづけたこと、歌誌「二荒」を創刊し、その編集を担当したこと、「二荒」と「下野短歌」を合併し、石川暮人を発行人とする「下野短歌」の編集にたずさわったこと、「下野短歌」は、その後全国的に発展したのに伴い、名を「窓日」と改め、清水比庵を主宰としたが、昭和 50 年、比庵が死去したため、白潮がその後を継いで主宰となったことなどがわかる。

「江連白潮選集」には下記の歌集から 300 首ほどを選んで掲載している。

歌集「さわらび」	昭和 3 年～昭和 8 年	77 首
歌集「真鳥」	昭和 8 年～昭和 39 年	145 首
合同歌集「鈴かけ」	昭和 40 年～昭和 50 年	43 首
雑誌「窓日」	昭和 40 年～昭和 50 年	43 首

江連白潮歌碑建設委員会の渡辺保一郎はその序文において「忽忙のうちにこれを纏めたので収容歌数が少なく、庶幾の目的である先生の歌の全容を知る要素とならないことは遺憾であるが、やがて「真鳥」以後の作品につき歌集出版もあると思ふので、その時を期待されるやうお願ひする。」と書いているが、残念ながら、その後「江連白潮全集」が発行された気配はない。「二荒」「下野短歌」「窓日」などの歌誌がみつかれば、新たな発見があるかもしれない。それで、それぞれ「日本の古本屋」で検索してみた。「下野短歌」第 27 巻第 1 号と第 2 号の 2 冊が出てきた。ひたちなか市の常陸野という古書肆が持っていた。それぞれ、白潮も短歌のいくつか、論評、編集後記を書いている。

さて、「とちぎの短歌」に戻る。白潮の教師としての略歴はこうである。

○大正 15 年(19 歳)、師範学校を卒業し、短期現役兵として入隊し、8 月除隊すると同時に日光町第二小学校に赴任。

○昭和 5 年(23 歳)4 月、鹿沼町尋常小学西校(現中央小学校)に転勤となり、昭和 25 年 3 月まで満 20 年間勤務。

○昭和 25 年 4 月、鹿沼市立酒野谷小学校の校長に任命される。(何年までか不明)

○昭和 32 年 4 月、鹿沼市立北小学校長として転勤。

○昭和 39 年 3 月、北小学校長を最後に教職を退く。

酒野谷小学校長としていつまで勤務したかはわからない。それで、「日本の古本屋」で「栃木県　校長」を検索してみた。すると「第七回全国連合小学校長会総会　栃木大会要録」が出てきた。大阪の古書楽人館(がくとかん)が持っていた。昭和 30 年 6 月 2、3、4 日の 3 日間、鬼怒川温泉公会堂で催された全国小学校長会総会の記録である。参加者、つまり昭和 30 年 6 月における全国の小学校長の名簿が含まれる。栃木県からは 428 名。うち鹿沼(この段階で南押原、南摩、粟野は鹿沼に合併していない)からは 18 名参加している。この時点での校長は中央小が江面昇、東小が小久保和市、北小が谷原利雄、菊沢東が江連亀吉(白潮)、菊沢西が青木俊雄などである。従って、白潮は鹿沼では昭和 5 年から昭和 25 年まで現在の中央小学校に勤務してのち、酒野谷小、菊沢東小、北小学校に、それぞれ校長として職責を果たしていることがわかる。

白潮の良い顔写真がないものか。先に入手した比庵の写真集「ふたつなき」を思い出した。白潮の編集した写真集でもあり、比庵の最も近くにいた人物であることを思えば、比庵と一緒に写った写真があるのは自然である。開いてみると口絵として比庵の絵を3点ほど配置し、白潮の序文がある。それに続いて比庵の顔写真、諸々の会合における比庵を中心とした集合写真、比庵の仕事風景、比庵の歌碑の写真が収められている。また巻末にある清水比庵年譜も貴重である。「江連白潮選集」の見開きにある、富士山公園の歌碑に立つ白潮の顔写真を参考に、集合写真を 1 枚 1 枚見てみた。白潮は少なくとも 5 枚の写真に写っている。1 枚は比庵の墓地での集合写真であるが、その他は比庵と隣同士で座り、またはすぐ近くにいる。比庵と白潮の関係の深さ、また白潮の歌人としての高い立場を察し得る写真である。

江連白潮の小学校校長としての経歴は、「郷土の人々　鹿沼・日光・今市の巻」(昭和 47 年 6 月 28 日・下野新聞社)でも確認することができた。「江連亀吉は酒野谷小校長から菊沢東小、最後に鹿沼北小校長を歴任して退職。白潮と称し、下野新聞社の短歌選者として活躍、地方文芸の向上に大きな足あとを残している。木喰上人研究の一人でもある。この木喰上人研究家はもう一人、長谷川黙念がいる。お経を味わう会やウチワ展などを開き常に古いものから新しい方向を見い出している。」ここでは白潮が木喰上人の研究家であったことがわかる。長谷川栄一郎(黙念)には「木喰上人長崎歌集」があり、白潮とつながりがあったのか、今後の研究の課題である。

もう十数年前からだったと思う。「日本の古本屋」で「鹿沼」を検索すると「大鹿沼市を展望する　若鹿特集」という本が多くの鹿沼関係の本の中に見出されていた。つくばみらい市の「くら書房」が出品している。発行は昭和 24 年。戦後復興の中で、鹿沼の著名人たちの希望や夢に満ちあふれた内容を想像させる表題である。付記として「若鹿グループ」とあるだけで、内容や執筆者もわからないので見送っていた。しかし、どんな人が執筆しているのか、確認しないわけにはゆかず、注文してみた。発行人は「若鹿文化グループ」で、市制 1 周年を記念して発行された小冊子である。目次を見てみると執筆者は多く、主に教育関係者が名を連ねていて、その中に、塚田泰三郎、江連白潮、高内壮介、長谷川黙念(栄一郎)、上澤謙二の名も見られる。今後、本誌で取り上げてみたい錚々たる面々である。白潮はここに短歌 5 首を寄せている。

① 江連白潮について、本誌定番の郷土資料にはこのように紹介されている

柳田芳男「かぬま郷土史散歩」より
（平成３年４月28日・晃南印刷発行）

32、花岡町

3、富士山の文学碑

…頂上に近い駐車場入口手前に、昭和 50 年に建てられた江連白潮氏の歌碑がある。

野の極み　つくば嶺を据ゑ　下野の　名におふ鹿沼　皐月ノ花の町

白潮

（裏面）江連白潮先生は塩谷町に生まれ、昭和のはじめ清水比庵先生の門に入り、歌誌二荒の創刊に加わった。今もその後身窓日短歌会の編集同人である。また昭和三十三年、鹿沼鈴懸会を興し、後進の誘掖に当たり、現在に及んでいる。

あたかも今年は作歌生活五十年にあたるので、知己友人相はかり、記念にこの歌碑を建てて、先生の功績を顕彰することとした。

昭和五十年十月五日

江連白潮歌碑建設委員会

翌年、酒野谷円明寺に第二歌碑が建立された。さらに白潮氏の略歴につけ加えるならば、歌集としては、昭和 8 年刊行の「早蕨（さわらび）」をはじめ「村里小安」、「ひのき原」、「真島」、「江連白潮選集」がある。39 年、鹿沼北小学校長を最後に教職を退き、同年から下野新聞文芸欄の短歌選者となり、また、51 年に窓日主宰比庵氏死亡の後を受けて主宰となり、今日に至っている。同年栃木県文化功労賞を受賞、60 年には勲五等瑞宝章を受章している。末広町現住。

※　本誌 27 ページに富士山の歌碑写真と建立の詳細、
21 ページに円明寺の歌碑写真あり、ご参照のこと。

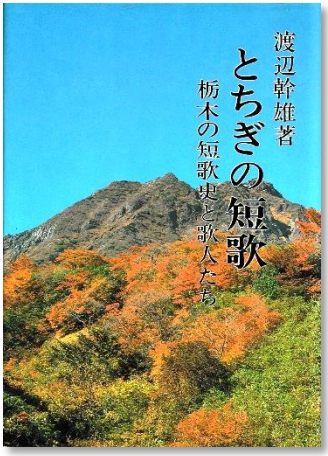
② 江連白潮、栃木県の歌壇における評価

渡辺幹雄「とちぎの短歌―栃木の短歌史と歌人たち―」
（昭和 60 年 10 月 20 日・下野新聞社）

風土に根ざした歌風　　江連白潮

（一）その生涯

白潮（明治 40 年「1907」―本年 78 歳）は、明治 40 年 9 月 9 日、塩谷郡船生町大字船生（現塩谷町船生）において、父健次、母タキの五男として生まれた。本名は亀吉という。



大正 11 年（1922）3 月（15 歳）船生尋常高等小学校高等科を卒業し、4 月に栃木県師範学校本科第一部に入学した。

大正 13 年（1924）（17 歳）国語の本居亮一（「国民文学」同人）の薫陶によって、短歌を作りはじめた。更に翌年の秋ごろ、下野新聞（高塩背山が選者）へしばしば短歌を投稿した。

大正 15 年（1926）3 月（19 歳）、師範学校を卒業し、短期現役兵として入隊し 8 月除隊すると同

時に、日光町第二小学校(現日光市流滝小学校)に赴任し、星野理一郎校長(昭和 30 年郷土史研究により栃木県文化功労章をうけた)に仕えた。

昭和 2 年(1927)(20 歳)この頃「国民文学」「ぬはり」「短歌雑誌」などに投稿し作歌にはげんだ。

昭和 3 年(1928)10 月日光電気精銅所の経理課長として来晃した清水比庵の門に入り、同好の者 30 名と「二荒短歌会」を作り比庵の指導をうけた。またこの頃「青虹」(釈迢空系の歌誌、大脇月甫主宰)、「あけび」(花田比露思らによる根岸系歌誌)に入社した。「あけび」には、その後長く会員としてとどまった。

昭和 4 年(1929)二荒短歌会の合著歌集「赤薙」を発行した。出詠者は 24 名であった。この年 7 月、宇都宮で石川暮人らが「下野短歌」を創刊したが、「下野短歌」へも創刊当初から断続的に投稿をつづけた。

この年 10 月、二荒短歌会を発展的に解消し、鬼平一郎らとの話合いにより郷土歌誌「二荒」を創刊し、昭和 5 年(1930)8 月以降休刊するまでその編集を担当した。「二荒」は、昭和 14 年(1939)10 月、「下野短歌」と合併するまで満 10 年間休刊することなく 120 冊を刊行した。

昭和 5 年(1930)4 月、鹿沼町尋常小学西校(現中央小学校)に転勤となり、昭和 25 年(1950)3 月まで満 20 年間勤務した。転勤した 4 月中旬、清水比庵の媒酌により大出キヨと結婚し、鹿沼市下田町に居を構えたが、6 月以後毎月自宅で「十日会」と称する短歌会を開いて、渡辺保一郎、福田武男、茂呂誠太郎らと共に歌作に精進した。

昭和 8 年(1933)6 月、(26 歳)歌集「早蕨」を二荒叢書第三篇として発行した。

昭和 14 年(1939)5 月、清水比庵は日光町長を退き市川市の自宅へ移ったが、これを機に「二荒」は「下野短歌」ときわめて円満に合併して、二荒合同の「下野短歌」が誕生した。発行人は石川暮人となり白潮はその編集にたずさわった。しかし戦時下で紙の入手の困難等のため、昭和 19 年(1944)4 月「下野短歌」は休刊するにいたった。

昭和 21 年(1946)「下野短歌」が復刊されるや、再びその編集委員、選者として後進の指導につとめた。

昭和 25 年(1950)4 月(43 歳)鹿沼市立酒野谷小学校(当時は東大芦村立)

の校長に任命され酒野谷に転居したが、昭和 28 年(1953)、酒野谷在住 3 年間の短歌をまとめて「村里小安」を下野短歌小歌集叢書の一つとして出版した。

昭和 32 年(1957)4 月、鹿沼北小学校長として転勤した。この年「下野短歌社」を自宅に移し現在にいたっている。

昭和 33 年(1958)鹿沼市民を対象に、「鈴懸短歌会」を創設し、毎月短歌研究会を開催して指導に当たり、昭和 36 年(1962)3 月には鈴懸合同歌集「鈴かけ第一」を発行し、その後も隔年ごとに発行を続けている。なお前年の昭和 35 年(1960)10 月には、歌集「ひのき原」を刊行した。

白潮は、歌人として作歌に精進しまた後進の指導に尽力する一方、教育界においても重鎮として重きをなし、昭和 36 年(1961)4 月には上都賀地区小学校長会長、昭和 38 年(1963)4 月には栃木県小学校長会の副会長の要職に就くなど、本県教育の振興に尽力した。ために、栃木県教育委員会より表彰をうけたが、昭和 39 年(1964)3 月、功成り名を遂げて教職を辞した。

なおこの年 1 月、下野新聞の文芸欄短歌選者となり後進の指導にはげみ今日に及んでいる。

白潮は 38 年間におよぶ教職生活を退き漸く閑暇をえたのを幸いに、昭和 40 年(1965)8 月、処女歌集「早蕨」{昭和 8 年刊)以後の歌をまとめて、歌集「真鳥」を出版した。「真鳥」の名は、師の清水比庵が万葉集の歌(巻十二、三一〇〇)

思はぬを思ふといはば真鳥すむ卯名手(うなて)の杜(もり)の神ししらさむ

(思ってもいないのに思っていると言うと、鷲のすむ卯名手の杜の神様が御成敗なさることだろう)

からとって名付けたもので、「真鳥」とは鷲のことである。この歌は、恋にも誠実であるべきことを詠んだ歌であって、白潮の誠実な人柄にふさわしいとして比庵が名付けたものという。

「下野短歌」は、その後全国的に発展したのに伴い、名を「窓日」と改め清水比庵を主宰としたが、昭利 50 年(1975)比庵が死去したため、白潮がその後を嗣いで主宰となり今日に及んでいる。

昭和 50 年(1975)10 月、白潮の作歌生活 50 年の記念事業として、同僚や門下生によって鹿沼市富士山公園に第一歌碑が建てられた。

野の極みつくば嶺を据ゑ下野の名におふ鹿沼皐月の花の町

なお、歌碑建設を記念して「江連白潮選集」が出版された。

更に昭和 51 年(1976)4 月には、かつて校長として勤務した鹿沼市酒野谷の円明寺境内に第二歌碑が建てられた。

石裂(おざく)への札所一番円明寺百鳥の響(とよ)み山より聞ゆ

白潮には、すでに述べた著作のほか、合同歌集、郷土の先輩歌人半田良平の研究をはじめ研究論文も多い。これらの長年の文化振興への功績が認められて、昭和 51 年(1976)11 月、栃木県教育委員会から栃木県文化功労章をうけた。

そのとき白潮は、次の歌を詠んだ。

永らへて栄ある今日に逢へりけり亡き師亡き友思ほゆるかも

いくばくか残る命にいや光る歌を詠むべし思ひ新たに

(二)白潮の歌

歌人白潮は、大正 15 年(1926)9 月、日光第二小学校(現清滝小学校)の教師として赴任して以来、生涯の大部分を教員として過ごした。白潮の作品の中には、教育愛にもえて精進したその誠実な人柄をしのばせる作品が少くない。

卒業生の子らへ

(1)人の世は一に誠なり誠だにつね忘れずばやすからむ世ぞ

昭和 5 年(1930)4 月、日光第二小学校から鹿沼尋常西小学校(現中央小学校)へ転任前後のころの歌

(2)この庭の梅のはつ花咲きいでぬさかりに逢はで去りゆかむとす

(3)わかれゆく時ちかづきぬ昨日今日しみじみ児らにものいひにけり

鹿沼西小学校には、昭和 25 年(1950)まで 20 年間勤務したが、その頃の歌

晩秋初冬

(4)長病みし教へ子けふは来りけりはきはきものをいへるかなしさ

(5)戦線の父にあひたしと書きし綴方三重丸つけてわが涙しつ

大寒の日々

(6)家に帰りて深く深く息を吸ふおもひ吾の勤めも豈やすからず

昭和25年(1950)4月、鹿沼市立酒野谷小学校長となり、児童の教育に、教職

員の指導に、あるいは地域社会との連けいにと多忙な歳月をすごした。その頃の歌

(7)なりはひのしげき日々より放たれし七月下旬真玉のごと尊と

(8)正月の休暇をはりて机の上またとりちらかしてつとめ始まる

(9)コスモスははやも咲きしかこと一つ思ひ煩らふ日々のすぎゆき

(10)うすぐらくなりし校舎を一巡しかへりて吾の時間となさむ

昭和 39 年(1964)3 月、鹿沼北小学校長を退き、38 年間におよぶ教職に別れをつげた。

終業ベル

(11)終業ベル長くひびきて終りたりいく日か残るわれの勤務は

(12)わが為せる仕事の何か残らむかあはあはとして暮るる春日は

(13)卒業生二百五名のひとりひとり証書手渡してわがこと終る

白潮の歌人への第一歩は、昭和 3 年(1928)日光第二小学校に勤務中、たまたま日光電気精銅所経理課長として来任した清水比庵との出会いにはじまり、その師弟関係は生涯にわたった。その比庵は、作歌の心得について

「歌は一句に全力を注ぎ、他は寧ろ平凡な方がよい。小生は一句の工夫を重視する」

と門弟たちに指導した。白潮の歌は、正しく師の比庵の教えのとおり、極めて平明な表現でありながら、岩の割れ目にのぞく宝石のようなひらめきをみせる一句を含んでいる。

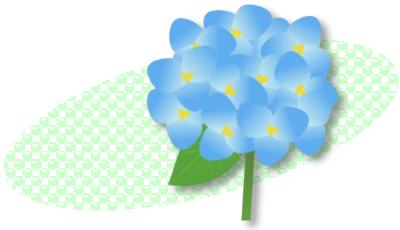
(4)の歌第四句「はきはきものを」

(5)の歌第四句「三重丸つけて」

(7)の第五句「真玉のごと尊と」

(8)の第四句「とりちらかして」

(12)の第四句「あはあはとして」



などは、特に一首を生かしている「一句の工夫」であろう。

白潮の優しい心情は、肉親たちに向けられて心暖まる作品となっているが、ここにもまた多くの「一句の工夫」のあとが見出せる。

昭和 9 年(1934)長男の病気のときに

癒えきりてはきはき遊ぶ日はいつか昨日も今日も咳苦し子は

枕べに一夜(ひとよ)わかしし鉄びんの朝(あした)はしるく湯の減りにけり

昭和 17 年(1942)二男小学校入学のとき

その兄と連れだちてゆく幼な子や草履袋を振りふり行くも

妻病む

わが母をははと呼びつつ吾妹子(わぎもこ)のみとられてゐるも母とよびつつ

酒野谷小学校長住宅において

わが家の裏にきつつきが来るものか妻はいひ吾は少し疑ふ

昭和 15 年(1940)12 月、母死去のとき

朝の飯(いひ)わがあたたかく食(た)うべつつおもひはつきず今は亡き母

白潮の歌は、自然詠においても、平易なことばで適確に風物をとらえて、情景を髣髴とさせている。

歌集「さわらび」より

落葉する弓張峠こえくれば思はぬ方に二荒山みゆ

慈悲心鳥三たび啼くやとわが待つに三たびは啼かず頬白なくも

男体に落ちし雲かげ時すぎて見れば動けり大真名子山に　日光千手原

歌集「真鳥」より

山腹をくだりくる牛朝草をここだ背負ひてゆらぎつつ来る

九州阿蘇山

甲斐のくによろふ山なみ雪の来る時近みかも天の澄みつつ　昇仙峡

野のきはみ低きは常陸の山々かふゆ一いろに暮るる天つち

芳賀郡にて

海猫のなく声ここに聞えぬや風のままに或ひは逆ひて飛ぶ

北海道襟裳岬

国上寺たからと残る良寛の大き屏風のまへにくつろぐ

越後国上良寛遺跡

白潮は、教職を退いたといっても、全国的な歌誌となった「窓日」の主宰として重きをなし、また随時各地の支社をまわり、更には地元の「鈴懸短歌会」の指導、下野新聞短歌欄の選歌など多忙な日常の中にあって、忙中なお閑ありの風情あ

る歌、更にはまた静かな老境の歌を詠みつづけている。

◇合著歌集「鈴かけ」および歌誌「窓日」より

退職ののちの日々倚る古机四十年をわれと在り経し

日々われの行のごとくにする散歩けふ寒日和一万歩こゆ

堤のみちわが散歩する霜のみち花といふ花を見ずなりにけり

明治の世毛のくにびととわが生(あ)れて出でて他国に住むとせざりき

白潮は、歌集「真鳥」の「巻末手記」の中で、

「小生の短歌は、〈二荒〉によって育ち、〈下野短歌〉と共に歩んで来たといっていい。これらの雑誌は栃木県に基盤を置くものであって、いわゆる地方誌である。……然し小生は短歌そのものには、中央も地方もないと信じきって歩んできた」と述べている。

白潮は、日ごろ栃木県の風土になじんだ生活即短歌の主張をつづけ、その主宰する歌誌「窓日」も素朴で何のてらいもなく堅実な表現を尊しとしている。その「窓日」が 1,200 余名の会員を擁して全国屈指の歌誌として生長した所以も、その堅実な歌風によるところが大きいと言わなければならない。

③　江連白潮の短歌の師、清水比庵とは…

渡辺幹雄「とちぎの短歌―栃木の短歌史と歌人たち―」
（昭和 60 年 10 月 20 日・下野新聞社）

「毎日歌境」の　　清水比庵

（一）その生涯

比庵（明治 16 年「1883」～昭和 54 年「1979」）は、岡山県上房郡高梁町（現在高梁市）に、清水質の長男として生まれた。本名を秀(ひで)という。

高梁中学、旧制第六高校をへて京都帝国大学法学部を卒業して司法官となったが、2 年後の 26 歳のとき安田銀行に入社、その後古河銀行、更に古河電気工業に移り、昭和 3 年（1928）45 歳のとき日光精銅所経理課長となった。これが比庵が本県と深いかかわりをもった端緒である。

このころ歌誌「満天星」「青虹」等に作品を発表していたが、後、花田比露思の「あけび」に加わった。また昭和 3 年には、処女歌集「夕暮」を出版した。

昭和 3 年(1928)江連白潮等を中心とする二荒短歌会を主宰することになり、翌四年 5 月には合同歌集「赤薙」を発行、10 月には日光在住の他歌人も加わり歌誌「二荒」を創刊、比庵はこれを主宰した。

この年比庵は、46 歳であったが、日光精銅所を退職、翌昭和 5 年 7 月には日光町より懇望されて町長に就任した。比庵は町長として行政的手腕を発揮するとともに、歌人町長として令名高く門下生の輪は次第にひろがりをみせることになった。「二荒」の傘下に集まってきた歌人は、戌亥善一、佐野敏男、篠原葭穂、菅原栄海、福田行川、河崎正、阿久津福吉、関根丈、郷間儀一郎、鈴木無庵、渡辺保一郎、福田武男、岡部道子、鬼平一郎、安藤栄樹、三塚義雄、野沢暁鐘、藤本とき、杉浦貴一、今井保夫らの俊秀で、比庵を補佐して編集を担当したのが江連白潮(現「窓日」主宰)であった。「二荒」は結成以来 10 年間休刊することなく、120 冊が刊行された。この間、比庵は歌集「朝明」を昭和 8 年(1933)に出版した。

昭和 14 年(1939)5 月、9 年間にわたり尽力した町長を辞し市川市へ移った。またこの年 10 月、「二荒」は石川暮人等の「下野短歌」と円満裡に合併した。

昭和 17 年(1942)11 月、家事一切を切り盛りして比庵を援けていた鶴代夫人が永眠した。比較的俗事に無頓着で身辺の雑事を苦手とする比庵の悲愁落胆は大きかった。

これを見かねて娘の清水明子夫妻と令弟清水三渓氏とが、比庵の書画の展覧会開催を計画した。比庵は青年時代から歌を作り絵を描き書をかいた。社会人となってからは、歌、書、絵の三芸にいよいよ精進していた。令弟清水三渓氏その他の尽力によって、昭和 17 年 12 月銀座の紀伊国画廊において、比庵、三渓兄弟の展覧会「野水会」の第

天翔ける窓の下より富士の山
麓まで見えひとり聳ゆる
比庵八十七

一回展が見事に開かれた。しかも当時の日本画壇の第一人者河合玉堂画伯の賛助もあって立派に成功し、翌年以降毎年開催され昭和 32 年玉堂画伯の追悼展まで 15 回の長きにわたって続いた。ちなみに「の水会」の名は、古歌

いにしへの野中の清水ぬるければもとの心を知る人ぞ汲む

によると言われる。こうして比庵は悲しみの底から立ち上っていった。

昭和 30 年(1955)には、比庵自筆歌集「窓日」を、更に昭和 33 年(1958)には、自筆歌集「窓日第二」を刊行した。

またこの年 11 月、徳川家正、小杉放菴と共に日光市名誉市民の栄誉をうけた。この時 75 歳であった。

更に昭和 34 年(1959)第一歌碑である

春風の二荒のやまはおほらかに雲井にそびえまたはかくるる

が、日光市公会堂前に建てられた。(現在は日光山内二荒山神社本殿西奥の庭園に在る)比庵の歌碑はこれを最初のものとして以後、栃木県内をけじめ、東京都、郷里岡山県の高梁市、笠岡市等に計 27 の歌碑(自詠歌碑 23 基、揮毫歌碑 4 基)が建てられたが、比庵の人格、芸術への景仰者がいかに多いかを示すものであろう。

昭和 41 年(1966)1 月、83 歳の比庵は、宮中歌会始めの儀に、召人(めしゅうど)の栄誉に輝いた。その詠進歌は

ほのぼのとむらさきにほふ朝ぼらけうぐひすの声山よりきこゆ

であった。日ごろ何事にも無頓着である比庵もこの折は流石に興奮気味であったという。

昭和 43 年(1968)、短歌雑誌「下野短歌」は「窓日」と改題され、86 歳の比庵は推されてその主宰となった。

「窓日」という歌誌名は良寛の詩からとったもので、改題の記念号に比庵は次のように述べている。

「〈窓日〉といふ詞は、良寛詩

空階　花狼藉
好禽語ツテ織ルガ如シ
遅々トシテ窓日麗カニ

細々トシテ炉煙直シ

の中の詞で小生の好きな語である。窓日は太陽の味はひである。上る朝日、沈む夕日の美しさは及ぶものもないが、高く上った太陽は窓日により味はふべし。窓日の歌人は、太陽の味、温かく、明るく、力強い歌を作るべきである」と。

良寛に私淑し、今良寛とたたえられた比庵の心底をうかがうに足る一節である。

比庵の業績はとどまるところを知らず、昭和 44 年(1969)2 月には、随筆集「紅をもて」を刊行、また日本テレビ「青春百歳」において、比庵の歌、書、画が紹介され、比庵は明子さんとともに画面に登場し視聴者に深い感銘を与えた。時に比庵は 86 歳であった。

その後も、比庵の歌書画の三芸にわたる活動は引きつづき、昭和 48 年(1973) 10 月、比庵短歌の総仕上げともいうべき自選歌集「比庵晴れ」が刊行された。歌集のあとがきに

「小生は不思議に天気に恵まれ、何かある場合必ずといってよい程天気がよい。今年の生れ日も

生れ日の明けて一天比庵晴れ窓日悠々満九十春

といふところで、この比庵晴れを歌集題名に用いた」と述べている。

昭和 50 年 5 月 10 日より感冒で病臥、一進一退を繰りかえしたが、10 月 24 日胆嚢炎に心臓衰弱を併発して永眠した。92 年 8 か月であった。

大なる文字書きてをる夢ばかり病臥五十日いまだ書き足らず

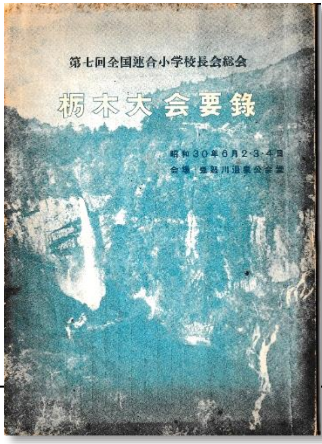
仰臥して書いたこの一首が遂に絶筆となった。

うつし絵のものを言ふかとばかりにも
喜ぶ人に送りやらまし
比庵八十五

13・15 ページ図版は「清水比庵の世界（窓日叢書第 48 篇）」より

④　江連白潮が小学校長であったころ

「第７回全国連合小学校長会総会・栃木大会要録」
（昭和 30 年６月２日・栃木県小学校長会）



三 ク 雄 勤 操 俊 郎 郎 一 三 已 潔 演 郎 吉 晃 雄 博 郎

〃	宮屋	池田成久
〃	篠井	渡辺明
河内郡	中里	丸山定次
〃	今里	神山浪一郎
〃	宮山田	手塚子之三郎
〃	小倉	菊地武
〃	岡本	印南政信
〃	白沢	田中恒雄
〃	本郷	松本忠文
〃	上三川	阿久津浩
〃	坂上	伊沢正
〃	明治	浜野辰治
〃	明治南	山口潤
〃	吉田東	海老原忠三郎
〃	吉田西	神尾皆次
〃	薬師寺	伊沢晃
〃	田原	小林三男
鹿沼市	北	谷原利雄
〃	菊沢東	江連亀吉

— 75 —

	菊沢西	青木俊雄
	北押原	中村進
	津田	田辺国光
	石川	佐藤勤
	池の森	落合清次
	茂呂	熊倉盛男
	加園	田村角造
〃	久我	竹沢清
〃	石裂	池沢喜佐次
〃	日向	横山茂
〃	引田	石川芳雄
〃	酒野谷	恩田貢
〃	下沢	大内義夫
〃	西大芦東	上沢孝
〃	西大芦西	益子正常
〃	板荷	津久井忠雄
日光市	日光	大村国松
〃	清滝	上吉原寿
〃	安良沢	町田令
〃	中宮祠	手塚英一
〃	所野	鈴木敬一
〃	久保	柳薫雄
〃	野口	平野延寿
〃	小来川	名塚利雄

今市市	大室	沼
〃	猪倉	柴
〃	小林	阿
上都賀郡	西方	大
〃	真名子	斎
〃	南押原	大
〃	楡木	佐
〃	藤江	古
〃	粕尾第一	谷
〃	粕尾第二	船
〃	粕尾第三	浅
〃	南摩	橋
〃	上南摩	古
〃	梶又	松
〃	清洲第一	金
〃	清洲第二	津
〃	粟野第一	阿
〃	粟野第二	植
〃	粟野第三	金
〃	永野第一	森
〃	永野第二	高
塩谷郡	粟山	湯
〃	湯西川	太
〃	日向	中

鬼怒川で開かれた
小学校長会総会の
出席者の中に
「菊沢東　江連亀吉」
の名が見える

川上澄生「男体山雪景」

⑤　栃木の自然紹介書へ歌人として寄稿している

「ふるさとの美」
（昭和 43 年 5 月 20 日・下野新聞社）

男体山を仰ぐ

江　連　白　潮

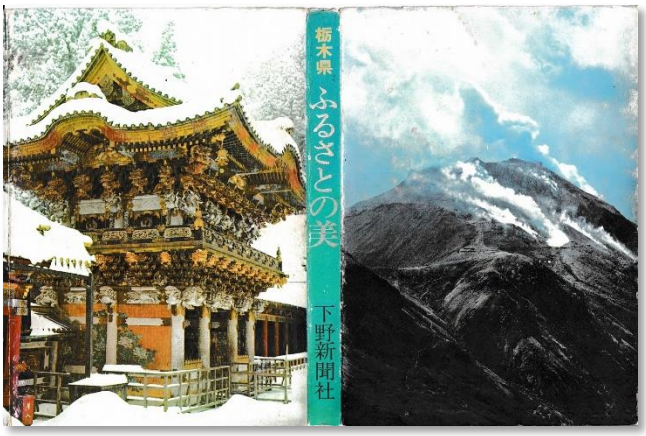
富士の山見ゆるところにをる人はあしたゆふべに楽しかるべし

これはかつて日光町長を十余年つとめ、現在日光の名誉市民である清水比庵翁の歌であるが、わたくしどもの栃木県では、この歌のようなわけには行かない。だが本県には男体山があり、県民は朝夕これを仰ぎ親しんでいる、前の歌を『男体山見ゆるところにをる人は…』と改めれば本県の人たちの心情にぴったりするであろう。

男体山はその高さ 2484 ㍍、小学生などは「西端」（にしはし）といって記憶したものである。この男体山は麓に中禅寺湖をたたえているが、山と水と両々相たすけている風景は絶佳というべきであろう。深田久弥はその著『思い出の山旅』のはじめに、

湖沼が風景として生きるのは、たいてい背後に山を負った時である。中禅寺湖から男体山をなくした場合を想像してみたまえ。その価値は半減するであろう。と書いている。

鹿沼の生んだ歌人半田良平は、大正 7 年 8 月 9 日、友人の松村英一・小田切浪彦と共に日光湯元温泉に一日の清遊を試みた。もちろん 50 年の昔のことであるから、途中の戦場ヶ原は徒歩であったろうが、その戦



本書カバー

場ヶ原より男体山を間近に仰いでつぎの五首を詠んだ。

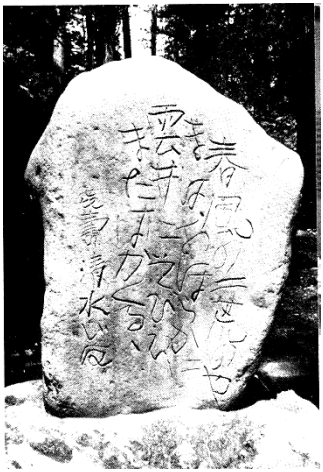
この原ゆただにそばたつ男体の山をかしこみ草にゐてあふぐ
男体の山を高みか天わたる雲はなづさふその山腹に
雲の行きしるくしあれや男体の山のかげりのややに動く見ゆ
この原をいかこみ立てる群山に目をうつしつついまはさみしき
群山のひくきところに路とめて奥の金山に人は通ふとふ

戦場ヶ原を往反して男体山を仰ぎ、これを歌に詠んだ歌人は数多くあるが、わたくしはこの良平の歌を先ず推したい。当時良平は 31 歳、すでに郷里を出て東京に在り、私立中学の英語教師であった。窪田空穂門の新進歌人の眼にとらえられた男体山仰望の歌は今日に至っても少しも色褪せていない。空穂の歌碑は数年前に中禅寺二荒山神社の境内に建てられた。歌は『五月なほ深きみ雪の男体の山にとけてはみづうみとなる』というやはり男体山の歌であるが、右の良平の歌の碑も戦場ヶ原あたりにぜひ欲しいものである。

中禅寺を下って日光の町に入る。東照宮西参道に近い市公会堂の庭には、はじめに書いた清水比庵翁の男体山を望む『春風』の歌碑が建っている。

春風の二荒の山はおほらかに雲居にそびえ　またはかくるる

ここから仰ぐ男体山は戦場ヶ原よりのそれとはちがって、その全貌をあらわさず、



僅かに上半部を見せている。昭和 34 年に建立されたこの歌碑は、周辺のはげしい自動車の行き来の中にあって、南は大谷の清流に臨み北西の空には『おほらかに雲居にそびえ』ている男体山を望んでいるのである。

男体山――これこそその美しさを誇るふるさとの山。勝道上人が霊峰と仰ぎ、あらゆる困苦をのりこえて開山してから 1200 年。わたくしどもに親しまれ、信仰の対象として救われて来たのである。

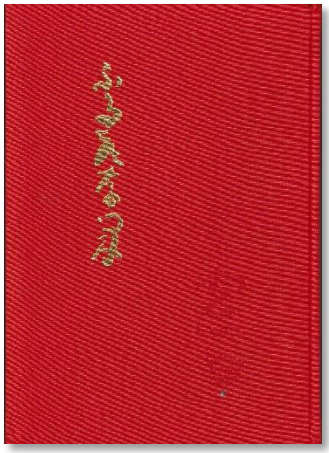
（歌人・鹿沼市）

⑥　短歌の恩師、清水比庵の写真集にもよく登場している

「ふたつなき～窓日五十周年記念（窓日叢書第 24 篇）」
（昭和 53 年２月８日・窓日短歌会）

窓日五十周年を迎えて

江　連　白　潮



私どもの窓日短歌会は昭和 4 年に創設されたものである。その後不幸にも戦争の惨禍などにあったりして、時に盛衰を免れることはできなかったがその命脈を保って今日に至り、昭和 53 年には創刊 50 周年を迎えることとなったのである。

昭和 48 年、創刊 45 周年を迎えた時には、主宰清水比庵先生はご健在で寿齢 91 歳、翌年その歌碑を東京の名刹深大寺に建立して記念としたのである。先生の歌碑は総計 20 数基に及ぶが、深大寺歌碑については先生は「小生の芸術作品の重要なる一つであって、歌も書も小生の芸術として天下に問うという意気込みを以て作った。」と「窓日」の「駒込だより」で申された程で、その名歌碑であることは疑うべくもない。

その比庵先生は昭和 50 年、会員一同、否、全歌壇、書壇、画壇の人々に惜しまれながら 93 歳の天寿を全うされ昇天されたのである。

←歌の恩師・清水比庵

私どもはその悲嘆の涙のかわかぬ裡に、創刊 50 周年を迎えるに至ったのであるが、記念事業の一つとしてこの比庵先生写真集「ふたつなき」を刊行し、追慕の情を新たにすることとしたのである。比庵先生の書画、又は短歌（長歌も含めて）、随筆等の著書は遥かに十指をこえている。その中には、数葉の写真を載せているものもあるが、未だ写真を主としたものはない。それで窓日短

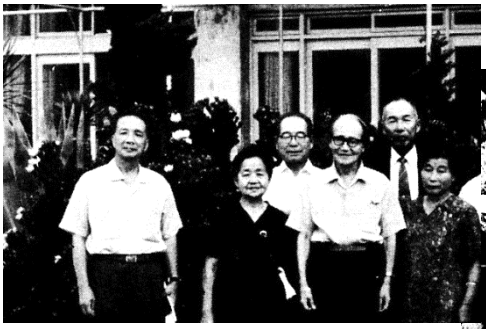
↑39.11.8　銀座松屋展
（右から 2 人目）

↓42.8.26　大洗の夏季大会にて
（前列中央左）

歌会の会員の総意により写真集を刊行し、永遠に先生の御遺徳を偲ぶ計画をたてた。これを遂行するのは容易なことではなかったが、幸いにご遺族の方をはじめ沢山の方から資料を提供して頂き、事務担当の諸氏の並々ならぬ努力と相俟ってここに刊行を見るに至ったのはまことに喜びに堪えない。

ただ頁数その他種々の制約があって、提供して頂いた貴重な資料も割愛しなければならない状態となって、私どもとしても十分満足すべき結果を得るという訳には行かなかったが、兎も角も一本を先生のご霊前に捧げることができるのはこの上もない喜びである。私どもは折にふれてこれを繙き先生を偲ぶよすがとしたい。先生は数ならぬ遺弟の私どものささやかな努力の結晶をきっとお喜び下さることと信ずる。

50 年といえば半世紀である。先生を中核として「二荒」「下野短歌」「窓日」と歩んで来た同志の中にも既にこの世を去られた方々が多い。それらの方々に「ふたつなき」を正目にご覧頂けないのは誠に残念である。幽(かく)り世で比庵先生



48.1.15　窓日 45 周年記念新年大会→
（前列中央左）

←45.8.30　犬吠ホテルにて（左端）

を囲み、この「ふたつなき」を中心として往時の追憶に耽って頂きたいものである。

右のような経緯で「ふたつなき」は刊行された。私は天地に対し、刊行に関係され助力を賜った諸氏に対し、深く頭を垂れて御礼を申し上げ、序に代えることとしたい。

51.7.4　雑司ヶ谷墓前にて（中央）

⑦　「文運隆盛」であった時代の鹿沼の文壇の重鎮・福富金蔵とのかかわり

三瓶恵史「福富金蔵・伝記　あすなろは勁（つよ）し」
（昭和 61 年９月 17 日・非売品）

歌人、福富先生

江連　白潮

小生が鹿沼の市民となったのは 56 年前の昭和 5 年のこと、この頃の鹿沼は文運隆盛ともいうべき時代で、短歌雑誌では松本仁の「日輪」と福田武男の「木の花」、それに文芸誌として福富先生の「野州文学」が刊行されていた。

何れもまだ文学青年ともいうべき方々で、昭和 5 年には福富先生は数え年 20 歳であったはず、歌壇の老齢化がいわれている現在とは隔世の観がある。

小生編集の短歌雑誌「二荒」（清水比庵主宰）は日光で誕生してまだ間もない雑誌であったが、この「二荒」へ福富先生が入会して下さったのは昭和 6 年で」、7 月号には早くも短歌十首を発表している。

新しき白足袋はきて土踏めば若き血潮ははや躍るなり

黒川に神輿をもむを見むとして両岸埋めしこの人の出や

など、八坂神社の神輿をかつぐ若き日の一コマの歌が載っている。その後、断続的ではあるが、今日の「窓日」まで続いている。県会議員として海外出張の機会がしばしばあるが、そのような時でも寸暇を割いて作歌し、航空郵便で小生のところへ送られる。

政治家の日常は我々のうかがい知ることのできない繁忙さであろう。ともすれば心のゆとりを失い勝ちのものである。

千葉県選出の代議士吉植庄亮は「橄欖（かんらん）」という短歌雑誌を主宰して、歌人としても第一流の人であった。その吉植門下の代議士井出一太郎はやはり「橄欖」の同人であるが、三木内閣の官房長官の激職にあった時でも月々作歌を怠らず、「橄欖」への出詠を欠かさなかった。わが「窓日」同人福富先生また然り、今回の「自伝」にも短歌作品が収められることと思うが、今後の活躍に深く期待する。

⑧　江連白潮の主な歌集と作品（選・阿部良司）

「江連白潮選集」より

（昭和 50 年 11 月 30 日・江連白潮歌碑建設委員会）

さわらび

わが家にー たび来よとつねいひきまことに来つるよ君はふる日に　悼 塩田実

人の世はー に誠なり誠だにつねわすれずばやすからむ世ぞ　卒業の子らへ

慈悲心鳥三たび啼くやとわが待つに三たびは啼かず頬白啼くも

わかれゆく時ちかづきぬ昨日今日しみじみと見らにものいひにけり

あなにやし愛をとめめとるけふの日の朝けの庭に雀しき啼く　結婚

男体に落ちし雲かげ時すぎて見れば動けり大真名子山に　日光千手原

わが立てるこの山の上にしくの城あとといくど残るものぞなき

鹿沼御殿山四首の一

山いく重かさなる奥は白根かもみねに光れる雪さむざむし
朝なさなかよふちまたの真向ひの巌山古賀志かすみたなびく　　転居一年
かはせみが一つみるよと見て立てば足にまつはるゆふ霧すずし
塩原三首の一
つぶらなるまなこ見開きあが真木夫われに迎へどまだ見えぬらし
長男誕生
みどり子が泣くと泣かぬと親われら心うれひにかたりあひつつ
あぐらして子を抱きをり物いへばふり仰ぎみるものいふわれを
理（ことわり）を説かむ彼らをつれ来よと倒れていひし首相犬養　　犬養首相遭難
吾妹子が単衣のきものかろやかに立居すずしきこのゆふべかも
赤薙や八重折る襞のひだ毎の雪しろがねに日をかへしつつ

真鳥

紅白の餅のまろらに顔も手も尻も肥え太り子は這ひ廻る
長男誕生日三首の一
わが友の育ちし村に友と来てあそぶ一日のよき日和かな
落合村三首の一
鳥屋（とや）にしてけさのつぐみを焼きてをり親しきものか焼くるその音
お陰さまで合格しましたと言ふ児らよ汝（なれ）にまさりて嬉しきぞ我は
みづうみをめぐる山々いまだなほ斑雪（はだれ）光りて天（あめ）ちかく立つ
子犬らが乳のむ絵本見入る子やこのごろ母の乳まさぐらず
田舎まちの小学教師あなあはれ受験の児らと共に痩せつつ
長病みし教え子けふは来りけりはきはきものをいへるかなしさ
長き病とみづから知れかおとなしく与ふるものを食べてをり子は
戦線の父にあひたしと書きし綴方三重丸つけてわが涙しつ
座禅する堂のしづけさ山門の外ゆく川の河鹿きこゆる
雲巌寺
弁当を持ちて来ぬ子のけふはなし皆たぬしげに食べ急ぎをり
おのが名も書けずに学校を卒へし子や煮豆を売りてよく働けり
み柩にしたがひてゆくこの道や母は再びかへりたまはず

年賀にも今年は行かず元日の一日(ひとひ)しばしば母をおもふも
逞しきひげの男に何ごともいふことのなしよくぞ還りつ　　甥帰還
横穴の壕より見れば貝島の部落寒々とみぞれ降るなり　　警報
飽くなき希み遂ぐるといふに非ずただにかすかに命生きむため

教員要求二首

一筋のおもひ遂げしめよ戦ひを棄てたる国を建ててゆかむぞ
命果てし君を正目(まさめ)に誰も見ず三とせののちになほ待たむとす
夕食のあと片付けを早くして妻あたたかく映画に出で行く
幼な子の賢きさまを妻とわれ賞むるは誰にははばかりもなき
幾たびか川瀬を渡りさかのぼる峡間のくもりふかくつづきて　　日光雲龍峡
よべは妻が泊りてゆきし住宅に今宵よりまたわれひとり寝る
わが家の裏にきつつきが来るものか妻はいひ吾は少し疑ふ
千人にあるひは誤解されしかど吾はただに君が純情を信ぜし

福田武男を悼む

常のごと食後の林檎わかち食ふクリスマス前夜のわが家の一とき
比叡山のいただきにして乱れ降る雪にぬれつつ在りしといふ妻
韮を切りあしたの汁をわが作る二日たたば妻の帰り来るなり
既にして手術終れる子のもとへ飛ぶが如くに妻の立ちゆく
鑑真和上持たししすずか下野のここに残るかわれは鳴らすも

下野薬師寺址

わがうまごうまれかいづる七月をほのぼの思ふわが妻と居て
おろかなるわれら人間いつまでもいのち生きゆく如く思へる
あららぎの大き木のもとつつましく茂吉の墓は少し小さし　　金瓶
この庭にさくら咲く日は吾は在らずひと日ひと日のいとほしくして
広庭にあそぶ児の群この児らとわかるるときの日々に近づく
終業ベル長くひびきて終りたりいく日か残るわれの勤務は
卒業生二百五名のひとりひとりに証書手渡してわがこと終る
老兵はきえゆくのみとマッカーサーのいへる如くに消ゆる老教師

鈴かけ

散歩

無位無冠無職のわれに丁寧に挨拶たまふ人は誰なる
池のほとり都忘れの花咲きて日にいくたびか吾は見にゆく
職もたで籠れるわれに昨日けふ庭の落葉の数限りなし
新緑の毛野の風光特急の電車にありて妻と見あかず
三寒につづく四温のきのふけふ今日も散歩にわれは出でゆく
克明に日々をしるしきみづからの命をたちし友をいたみき
明くる日に命たゆるとつゆ知らず歌送り来し君にし泣かゆ

噫臼井如水五首の一

みほとけとなり得ぬみたま宵々に雨戸敲くといふ噂なり
二もとの沙羅の大木花季すぎぬ釈迦のねはんをわが説かれゐる　永平寺
野のきはみ筑波嶺を据ゑ下野の名に負ふ鹿沼皐月の花の町

窓日

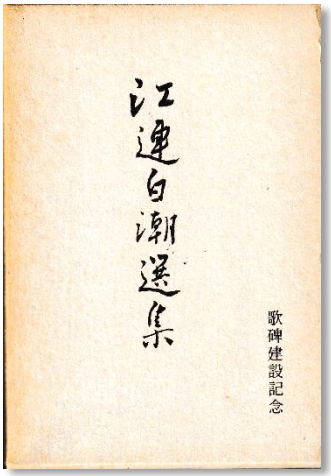
雪しるき北やまの風まともなるみ墓にあまた知己のみほとけ
わたらせの堤一線まさやかに水限りなし利根に入るべく
寒けれど風いでずよき日和なり二月八日比庵先生の誕生日
白萩はうゑていくとせ二つ三つ咲きたる花に花のつづかず
ゲバ学生日当八千円といふ話まことか否かつまの伝ふる
新雪の岩木山テレビにけさは見つきびしき冬のはやも至るや
吾子の乗る飛行機最初の着陸地アンカレッジを地図に求むる
事なくて帰りしと嫁の電話なりひと日立居のかろやかにして
深大寺にやがて建つべき比庵歌碑いしにぢかに書かすそば旨き歌を
故さとの慈覚大師のひらく寺あしたはやくも蝉のこゑ降る
この山の岩に染み入る蝉のこゑ蝉は何ぞとひと争いき
戦ひて死せるあり財を得たるあり世は移ろひて何れむなしき
大寒の鹿沼の歌会一堂につどふ九十六人けふあたたかく
沖縄の悲風の丘はわが知らずつまに逢はむときみ海を越ゆ
万止むを得ず戦はば負くること勿れ戦後はいまだ終らず

後　記

今回小生の歌碑建設記念として選歌集を出版して頂くこととなったのは、誠にありがたいことである。

小生の碑建設については 10 年ほど前からその話が起っていたが、わが終生の師、清水比庵先生でさえ、その第一歌碑を日光へお建てになったのは喜寿の齢であった、小生はまだ古稀にも達しない、とおことわりしていた。然し周囲の事情から、そうもいっておられなくなり、この企てを有りがたくお受けすることとした。そして今春その建設委員会が結成された。後々の思い出にその芳名を記せば、

委員長　渡 辺 保一郎
副委員長　外 池 美都子
同　江 連 芙二夫
事務局長　森 田 春 雄



発起人として、

阿久津福吉・阿部一二・石川晴子・石川マサ子・伊藤美代・井上悠逸・上野喬次・上野勇一・江連千鶏・海老原晩穂・大島子郎・落合八重子・上岡忠彦・河崎正・河瀬久良子・川堀総子・郷間ふみ江・小太刀弥一・小林節子・斎藤清・佐野敏男・須釜アヤ・鈴木一桔・関根丈・鷹嘴三夫・丹内福寿・螺良とく子・栃村世津・中村親平・庭出しづ・野沢学人・野沢智子・福田行川・増渕三穂・増渕梨雨・水野光二・見当豊・湊アイ子・宮下伊津子・山口泰司・吉新冨美

の 41 氏（県内の窓日支社長・窓日運営委員ほか）と鈴懸会一同、それに後援として窓日短歌会の小松北溟・西森善雄氏が加わった。

発起人会は宇都宮で再度開かれたが、実際に事務を担当して下さった方々は、拙宅にしばしば会合して実務をすすめて下さった。その方々は渡辺委員長・森田事務局長と、会計担当の北村一郎・山本佳明氏の外

山本喜重・小太刀威志・福田行川・坂本泰俊・麻生与作・菊地憲司・村木ミツ・沢田美代子・小林俊子・阿見英子・舘野マサ・岡田千鶴

の諸氏であった。回数は十数回にも及び、時には深夜に及んだ。

建設地は市有地の鹿沼市富士やま公園の頂上近く眺望のよいところをお借りし、碑の歌は清水比庵先生にお願いし、裏面は副委員長の外池美都子氏にお書き頂くことなどがつぎつぎに決定した。碑石は鬼石の方まで行き探したが、結局は根府川石ときまり、工事一切を当市篠原良三郎氏にお願いすることとした。ところが比庵先生は 5 月はじめよりご病気になり未だご全快なさらないので、止むを得ず小生が書くこととなったのは誠に残念なことであった。小生は比庵先生の書は後世千載に残る書であるといふ堅い信念をもっている、その書を当鹿沼市に残したいという念願は遂に果すことが出来なかった。これが今回の歌碑建設のただ一つの残念なことであった。

8 月 17 日、宇都宮市くろかみ荘での発起人会の際に、歌碑建設の記念品を何にしようかという相談になったが、結局は渡辺委員長提案の小生の選歌集と決定した。そして序文の中にあげた 11 氏と渡辺委員長に選歌をお願いし、それに若干の増減をして本集のように決定した。果してこのような記念品で皆さんに喜んで頂けるかどうかという危惧の念を禁じ得ない。

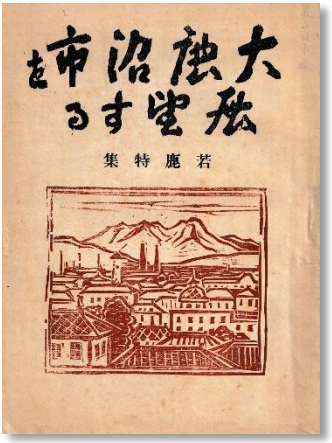
歌碑建設に際して先ず何よりも感謝申しあげなければならないのは沢山の方々から多額の醵出をいただいたことである。それから発起・後援の方々と、東奔西走して繁雑な事務処理に当って下さった事務局の諸氏の熱意も終生忘れることはできない感激である。長い間短歌を作って来たというだけで、外に何の取柄もない小生にとっては、まことに身に余る光栄である。これからの余生も、ますます斯道に精進しなければ、との感を深くする次第である。

昭和 50 年 10 月

江 連　白 潮

⑨　地域誌（鹿沼市制１周年記念）へ短歌で参加

「大鹿沼市を展望する　若鹿特集」
（昭和２４年１２月２５日・若鹿文化グループ）



筑波山はたてに見ゆる野のみのり
　　篁負へる君が家ちかし
農繁期近づくいへに一夜いね
　　コスモス紅き庭に真向ふ
尻尾立てて朝の寝室を出でてゆく
　　黒猫を見ていましばし寝む
一茎の龍胆のはなみづみづし
　　朝の職員室に人のともしく
もみぢ葉はいまだは早し吾ら来て
　　ひと日を遊ぶ高原のうへ

⑩　短歌雑誌への寄稿作品あれこれ

「下野短歌第 27 巻第１号」
（昭和 30 年１月１日・下野短歌社）

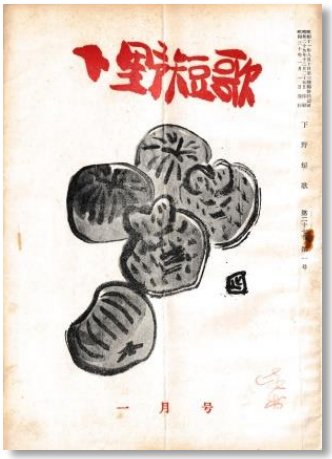
頌春歌

新どしの未の年はわがとしと人にも言ひてめでたくもあるか
集会の席にても必ずしも若からぬよはひとなりぬ命いとほし

作品（一）

庚申山荘に猿飼はれゐていきいきし猿といへどもここに見ればかなし
登山道より少しわきに入れば茸などありと聞けどもあへぎて登る
芳賀ごほり初ふゆの野の夕べにてバスに疲れて眼をつぶる
野のきはみ低きは常陸の山々かふゆーいろに暮るる天つち

「流木」小見



江　連　白　潮

「流木」は本誌同人渡辺保一朗氏の近業である。極めて手軽な小歌集であって、昭和 28 年 11 月、歌に復帰してから約 1 年間の作品百十七首を収めて居る。序文によれば今後引続いて毎年、1 年分を纏めてゆきたいとのことであるが、との企画はなかなか良いと思う。本誌の小歌集叢書よりやや体裁を整えたものであるが、氏の歌に対する慨熱の並々ならぬものをうかがうことが出来る。

小生が氏と相識ったのは既に20余年前であって、氏と従兄弟の故福田武男氏と同時期である。当時氏は 24 歳（小生と同年であった筈）であったが、既に歌人として一家を成していたので、小生にとっては先輩であり畏友であった。その後いつの間にか氏の歌を見なくなったので、折に触れて復活を願ったが、20 年の後に漸く本誌に帰り、空白時代を克服してみずみずしい柔軟な詠風を見せている。氏の休詠中の 20 年は歌壇の混濁の時代であったから、かえってその清純さを保ち得たかとも思われる。

霧の下の家居はいづこ山上にながながと牛の声きこえくる（黒川水源峡）
いく谷々越えとぶ鷲の舞ひ落すかげは樹海の白きにうごく
落ちゆきし石は谷底につきたるらし霧つきあげて音かへりくる

復帰して間もない時代の作であるが、このあたたかくして然も確実な手法はどうであろう。従来本誌に見られたであろうか。小生はここに作者の体温を感ずるのである。

焚火している子らが見る目のしたしければ行人われもあたらせて貰う
まんさくの花咲く山の工事場に石割る人のしわぶききこゆ
野ねずみが木を食ひ荒すといううわさ山越に来し人が伝えぬ

小生は中国布野村に退いた後の中村憲吉を思い浮べていた。然しここは憲吉の気むずかしさは感じられない。

「流木」の著者は必ずしも新風を心がけてはいないようであるが、従来の歌境を深めることによって愈々独自のものたらしめるであろう。来年の集に更に大きな期待をかけたいと思う。

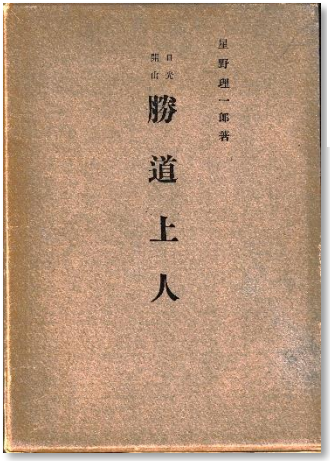
⑪　教員として最初の赴任校の校長であった星野理一郎に寄せて

「下野短歌第 27 巻第２号」
（昭和 30 年２月１日・下野短歌社）

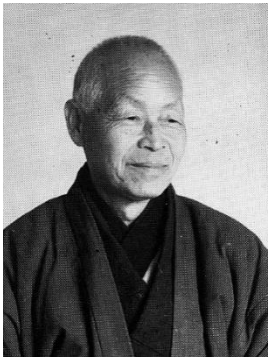
作品（一）

星野理一郎先生の「勝道上人」上梓を祝す

疎かにし給はざりし日々にしてかかる著述をおほやけとしつ
誤られ伝へられ来し上人のひとよを究め余すところなし
毛の国をいづるなくして終りしか上人のひとよにわれは涙す
星野先生を千二百年ののちに得て勝道上人いま審かなり
二荒のみやま拓きに終りたる上人のみ像はやも建つべし



星野理一郎著
「日光開山・勝道上人」
昭和 29 年 12 月 10 日発行
（非売品）



星野理一郎↗
明治 17 年（1884）日光生まれ。
栃木県師範学校卒業後、日光市内の小学校や
実業補習学校に奉職すること 35 年。
著書に「日光史」「精銅所 50 年」「日光の地質」
「勝道上人」「日光の碑標」
昭和 41 年（1966）、日光市名誉市民に推挙される。
同年、死去。

⑫　再び冒頭の本に戻って、鹿沼の小学校の沿革を探る

柳田芳男「かぬま郷土史散歩」より

（平成３年４月28日・晃南印刷発行）

5、博貫舎と中央小学校

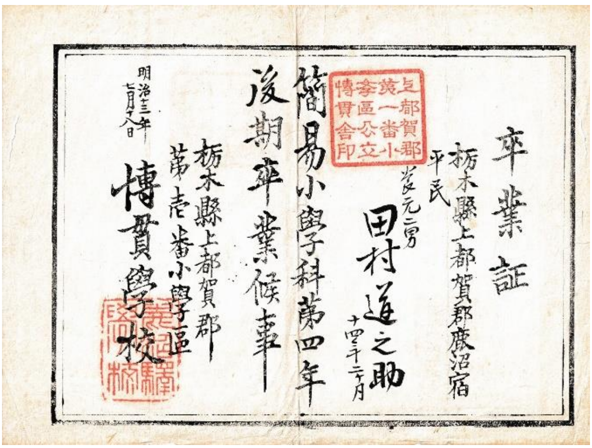
明治に入り、この御殿跡の地に小学校が建てられることになる。

明治 5 年に、学制が施行されると共に学区制がとられ、鹿沼宿は、栃木県の第 38 番中学区第 94 番小学区となり、翌 6 年には最初の小学校が久保町裏に設立された。「博貫舎」と称し、現中央小学校の前身である。(中略)

開校時200名を予定していた生徒数は、明治10年には男205名、女154名、計359名に達していた。ちなみに、同年の学齢人員は836人で、就学率は約43パーセントであった。また、10 年度歳出額は約 480 円である。教員も、渡辺・鳥居・田村・斎藤・藤井・天野・舟曳（ふなびき）・西村・戸田・荻原の各氏 10 名を数えるほどになった。その頃の校名は鹿沼宿博貫舎で、鹿沼宿小学博貫舎・第一小学校博貫舎、第一番小学博貫舎とも称していた。分校も、戸張町・寺町(雲龍寺)・上横町・西鹿沼にあった。

その前後、校舎を御殿跡に移転している。明治12年には女子部を設置し、それを同 17 年に根古屋に移して独立校とし、鹿沼女学校(院)と称した。その頃、博貫舎も鹿沼学校に改称されていた。

明治19年に小学校令が公布され、小学校を尋常(義務教育)・高等の２段階とし、修業年限を各 4 か年とした。よって、同 20 年 4 月に鹿沼女学校を合併し、宿立鹿沼尋常小学校、郡立上都賀郡第一高等小学校の２校となった。


卒業証
栃木縣上都賀郡鹿沼宿
平民
田村道之助
簡易小學科第四年
後期卒業候事
栃木縣上都賀郡
第壱番小學區
博貫學校

明治 13 年の博貫学校卒業証書

22 年の町村制施行により、1 宿 3 村が合併して鹿沼町が生まれ、翌 23 年には両校共町立となった。さらに、25 年には尋常科に高等科を併置し、鹿沼尋常高等小学校となり、この校名は、通学区域を一部分離して鹿沼尋常高等小学東校が新設される昭和 4 年 1 月までの約 37 年間続いた。その間のみならず、その後も「併置校」の通称は、鹿沼町民にとって親しみある呼称でもあった。

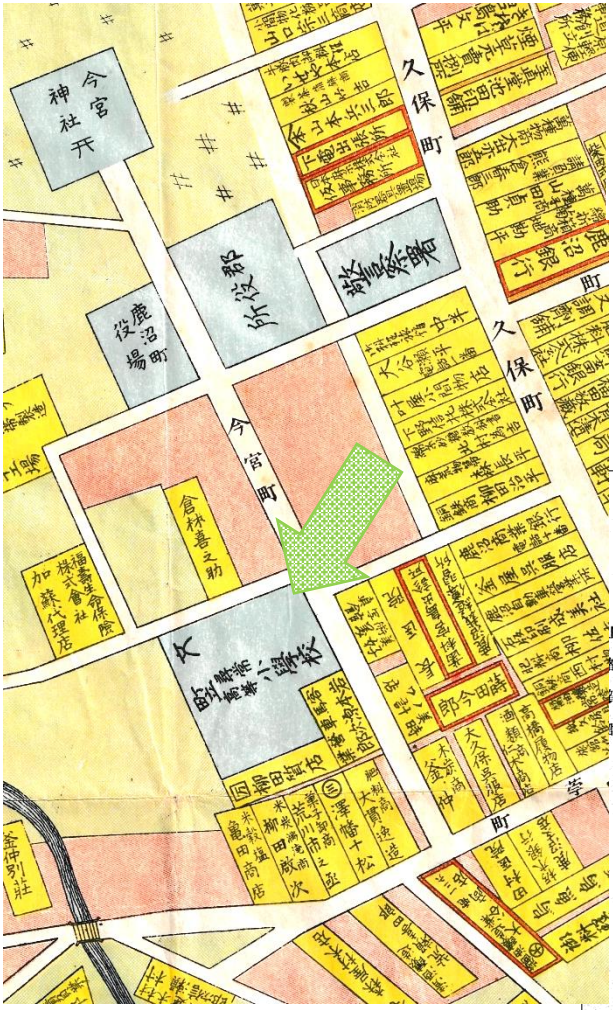
明治 28 年には同窓会が結成され、地域文化との交流も活発になっていった。一方、同 35 年には西側の台地（現中央小学校の校舎の建っている所）を購入して敷地を拡張し、2階建本館教室の新築完成間際、みぞうの大暴風（足尾台風）により倒壊するという大被害を受けている。

大正 2 年には町立実科高等女学校を付置し、同 4 年には青年会により校内に鹿沼図書館が設立され、同 14 年には御殿山の南（現上都賀庁舎の所）に校舎を新築して高等科が入った。以後、ここを、「新校舎」と通称するようになった。

鹿沼尋常高等小学校は、児童数が年々増加し、昭和 3 年には学級数 64、児童数 3577 名、教員数 78 名という尋常小学校としては栃木県第一、全国でも屈指の大規模校となり、翌年度には、分割して鹿沼尋常小学東校を新設し、さらに、鹿沼高等小学校を分離して、校名が鹿沼尋常小学西校となった。しかし、9 年には、再び合併して鹿沼尋常高等小学校の旧称に復し、10 年には、尋常科を分割して、鹿沼尋常小学北校を新設している。

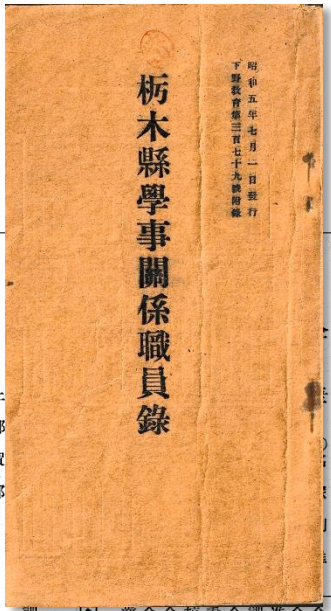
戦時体制下の昭和 16 年に鹿沼国民学校と改称、戦後同 22 年には、学制改革（六・三制制定）により鹿沼町立中央小学校という校名になった。その際、高等科は新制中学校となり、鹿沼中学校として分離されたが、当座の校舎はもとのままであった。25 年に中学校は東・西 2 校に分離し、鹿沼市立西中学校は、25 年から 27 年にかけて旧鹿沼実科高等女学校の跡に移ることになる。

昭和 23 年の市制施行と共に、中央小学校は鹿沼市立となり、現在に至っている。校舎の老朽化と校庭が狭いこともあって、37 年から 40 年にかけて、東側低地にあったコの字型に配置された校舎（通称下の学校）を全廃し、西側高地に校舎を集めて 3 階建とし、学校の景観を一新している。一部、46 年に増築しているが、48 年には創立 100 周年を迎えて記念式典をあげ、鹿沼市の中心校として重きをなしている。



大正２年 11 月９日発行
「鹿沼町商工名家案内図」より

中央下寄り、今の中央小学校の場所に「町立尋常高等小学校」の名が見える



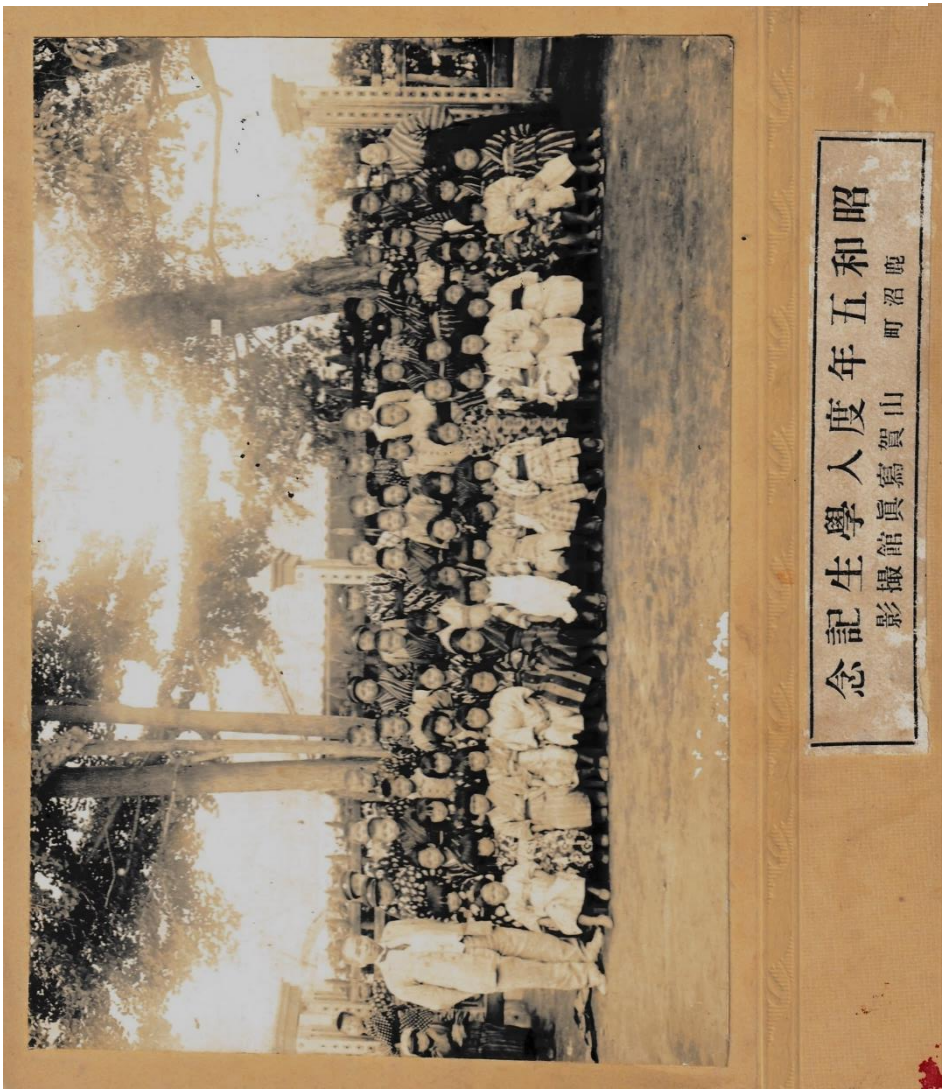
昭和５年７月１日発行の「栃木県学事関係職員録」によると、鹿沼尋常小学西校の訓長（校長？）は阿久津量平、訓（教頭？）は木村光明。東校の訓長は柳田茂一、訓は飯塚一郎。ちなみに鹿沼高等小学校の訓長は石川利右衛門、訓は小太刀源吉。小太刀源吉は柳田芳男氏と並ぶ、鹿沼の誇る郷土史家である。著書に「鹿沼史」「鹿沼史　続編」「天明・天保の飢餓を記録した鹿沼の人」等がある。

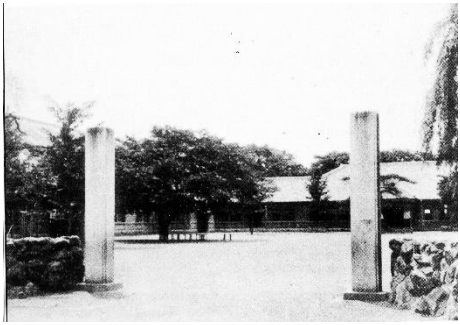
61 ページ左下に江連亀吉の名が見える。

写真帖に見る郷土の風景

～江連白潮ゆかりの鹿沼の小学校～

鹿沼尋常小学西校（中央小学校）と思われる昭和五年度の新入生。
江連龍吉はこの年、日光第二小学校から鹿沼尋常小学西校に転勤してきており、
満二十年間勤務した。
先の資料からすると、集合写真の左に写っている人物は阿久津量平か。





←中央小学校（旧・鹿沼町尋常小学西校）
（昭和 5 年から 25 年まで 20 年間在職）

「目で見る日光・今市・鹿沼の 100 年」
(郷土出版社)より

鹿沼北小学校→
（昭和32年から39年まで校長として在職）
職員室前の校庭に歌碑がある

春よ来い　春よ来いと歌を　うたふ子ら
うたのごとくに　春待つわれは

鹿沼市立西小学校校歌

作詞　江連　白潮
作曲　湯山　昭

一、二股山の　朝明けの
そのさわやかさ　それぞれの
心と体に　満たそうよ
鹿沼西小　明るい子ども

二、大芦川の　夕映えの
その清らかさ　ほこりとし
励ましながら　伸びようよ
鹿沼西小　かしこい子ども

三、野山のさちの　ふるさとの
かがやく歴史　うけついで
明日の飛躍を　誓おうよ
鹿沼西小　希望の子ども

ꕥ 本号の内容 ꕥ

文献蒐集雑録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

柳田芳男「かぬま郷土史散歩」より　富士山の文学碑 ・・・・・・・・・ 5

渡辺幹雄「とちぎの短歌―栃木の短歌史と歌人たち―」

　風土に根ざした歌風　江連白潮 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

　「毎日歌境」の　清水比庵 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

「第７回全国連合小学校長会総会・栃木大会要録」 ・・・・・・・・・・・１６

「ふるさとの美」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

「ふたつなき～窓日五十周年記念」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

三瓶恵史「福富金蔵・伝記　あすなろは勁し」 ・・・・・・・・・・・・・２１

「江連白潮選集」より ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

「大鹿沼市を展望する　若鹿特集」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８

「下野短歌」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８

柳田芳男「かぬま郷土史散歩」より　博貫舎と中央小学校 ・・・・・・・３１

写真帖に見る郷土の風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４

鹿沼に生きた人、生きている本・第6号

2022年8月発行

小さな旅クラブ　鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人　阿部　良司

携帯　090－1884－3774

FAX　0289－62－3774

携帯✉shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail　abeclean@gmail.com